

校長室の窓から（o^o^o） 文化祭での小さなエピソード ～華やかな舞台の裏に～

大成功で終えた文化祭。達成感や満足感、充実感に包まれた余韻もほんのひととき、子どもたちも先生方もすっかり切り替えて学校生活を送っています。切り替わっていないのはどうやら私だけのようです。もう少し余韻に浸っていたくて、文化祭の舞台裏——とりわけ担任が話してくれた様子について少しだけ綴ります。

文化祭前日、学校は朝から慌ただしさでいっぱいでしたが、朝一番、先生を教室に招き入れ、みんなで「おめでとうございます！」と声をそろえた瞬間、教室が笑顔満開。1, 2年副担任の先生が誕生日を迎えるにあたり、文化祭準備で忙しい放課後の合間を縫って、生徒たちが黒板いっぱいにメッセージなどを準備してくれていたのです。また、前日放課後、シンボルマークづくりを進めていた生徒たちが「たくさん進めて部門長を驚かせよう！」と、体調不良で不在だった生徒を勇気づけるかのように、みんなで力を合わせる姿は文化祭の象徴そのものでした。

当日の朝は、体育館にカメムシが多く発生していることに気づいた6年生たちが、「早く健康観察して体育館でカメムシ取りやりましょう！」と声をあげました。担任が心の中で「やってくれる人がいたら嬉しいな」と思っていたことを、子どもたちが先に動いてくれたのです。理由を尋ねると、「自分たちも嫌だし、お客さんに少しでも集中して見てほしいから」と。誰かに言われたわけではなく、お客さんのために動こうとするその姿から子どもたちの成長を実感した担任。

歌舞伎の本番前、緊張が高まる舞台袖で、「緊張しなくていいよ、いつも通りやればいいよ」と仲間をリラックスさせようと声をかける生徒。その言葉で空気がやわらぎ、みんなの表情がほころびました。また、幕の開け閉めを担う小学生に「仕事は代わるから、ステージを見てきていいよ」と早々に声をかける中学生の姿からは、舞台裏での上級生の優しさがにじみしました。

文化祭は、ステージの上だけでなく、見えないところにもたくさんの思いやりと工夫が詰まっていました。子どもたちのまなざしが、誰かのために向けられたとき、学校はそっと、未来を照らしながら、人を育てる場所になるのだと改めて感じました。

